

孤独な高齢者の 住まいとは



室蘭市医師会
三愛病院

ちばやすじ
千葉泰二

私の住む登別市は、人口約4.5万人で、65歳以上の高齢者は約1.7万人（37.5%）、75歳以上の高齢者は約9千人（20.2%）と高齢化してきている（令和4年6月1日現在）。2040年までは高齢者人口は増加するが、その後減少に転じると推定されており、地域包括ケアシステムを推進していくには、高齢者施設は在宅キーワードのひとつである。

市内の介護保険対象者は約3千人で、介護度別状況では、要介護1は約6.9百人、要支援2は約5.4百人、要支援1は約8.3百人で、軽度要介護者・要支援者は約7割を占める。また高齢者夫婦は約1万世帯、独居老人は約3千世帯であり、在宅生活の継続を困難にしている要因である（令和4年4月末現在）。

入所できる介護保険施設は、要介護2以上が大半で、要支援や自立の高齢者は、在宅か介護保険外の施設へ入所するしかない。最期まで在宅生活できれば良いのだが、ADLが低下し認知症状態となることも多く、周囲の介護や援助がないと難しい。

今回、83歳・女性（要支援2）から、「娘夫婦に気を遣ってまで一緒に生活できない」、82歳・男性（要支援1）から、「自分で何でもできなくなっているので老人ホームへ入所したい」、94歳・女性（自立）の息子から、「90歳を超えてまで一人で生活させるのは心配だ」との相談があったが、市内で入所できる高齢者施設は限られていた。

そのような背景の中で、当院の土地の活用にも悩んでいたのも相まって、要介護1～2・要支援・自立の高齢者を対象とした「住宅型有料老人ホーム（40名）」（以下、住宅型）の建設に踏み切った（令和4年11月に開設予定である）。

市内は、登別温泉地区（約1千人）、登別地区（約4千人）、幌別地区（約2万人）、鷺別地区（約2万人）と四つの地区に分かれている。特に建設中の登別地区の東側は、約2.3千人で人口減少が著しい（令和4年4月1日現在）。東側は登別温泉の玄関口であるJR登別駅があり、隣接して年度内に完成予定の情報発信拠点施設以外は、新しい建物はなく、空き店舗や空き家の多い、なんとも寂しい街並みである。登別駅から登別温泉までの街道は、「桜の花のトンネル」といわれ、沿道と中央分離帯に桜の木が植樹され、毎年5月の花見シーズンに多くの観光客が訪れることもあり、施設の名称を「山桜の郷」とした。

私どもの「住宅型」が、孤独な高齢者の癒やしの住まいになるとともに、地域の活性化の一助になれば幸いである。

小樽市における 新型コロナワクチン 集団接種の経験から



小樽市医師会
大本内科クリニック

おおもとあきひろ
大本晃裕

小樽市では、2021年夏の1、2回目接種、および2022年冬の追加接種の集団接種をウイングベイ小樽内を会場として行ったので、その経験をまとめてみたい。

1 および2回目の接種は2021年6月26日～7月31日の期間、計8,100回接種の計画で土・日曜日に行った。運営は某旅行会社に委託し、接種スタッフは医師会で募集、出向表を作成した。接種方法は、当時余市方式といって被接種者が椅子に座り移動せず、接種するスタッフが巡回するスタイルを取り入れた。残念ながらスタート直前になってワクチンの供給不足により急遽5,200回接種への規模の縮小を余儀なくされた。このとき、集団接種の予約を速やかに中止すべしとの声が医師会員より上がり縮小という道を選択したが、結果多くの医療機関に影響が出たことは日本全国の状況と同様である。

次いで翌2022年2月23日～3月27日の期間、同じ会場で土・日曜日に追加集団接種を行った。このときは別の委託会社となり、被接種者が移動する方式で行った。冬場のため衣類が多い着脱に時間がかかり、特に高齢の方が多くはその影響が顕著であったが、それ以外は順調に運営することができた。これは委託会社によるきめ細かな配慮抜きでは語ることができないが、入札の時点でそこまで判断することは難しいものと思われた。

2022年6月19日の時点での小樽市での接種率は、65歳以上では88.4%、0～64歳の方は49.4%、全体では88.5%となっており、特に若年者層における接種率が芳しくない。現在、市内の医療機関では3回目、および4回目の接種が行われているが、若年層ほど接種率が低いことを考慮して、3ないし4回目接種のための集団接種を8月の24日よりスタートすることになっている。接種後の副反応による仕事への影響も考慮し、金曜日の夕方と土曜日の午前午後小規模で行う。今までは医師会が行っていたスタッフ出向についても委託業者が全面的に引き受けてくれたため、医師会の負担はなくなった。大過なく順調に接種が進むことを望んでいる。